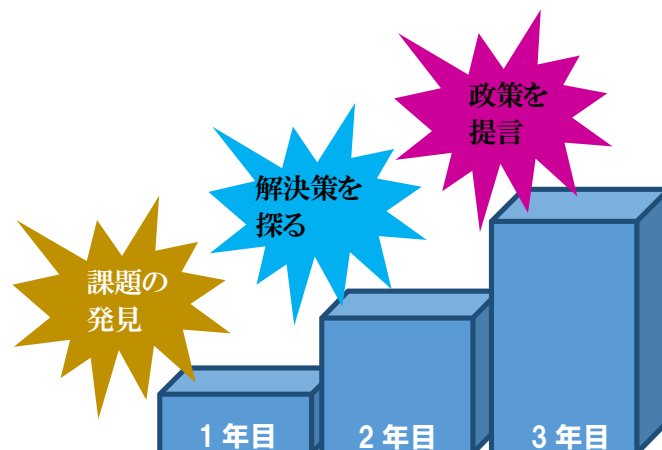


# 第1章 「熟議 2015 in 兵庫大学」 実施計画について

## 1. 3年間の熟議の集大成

2013年度、その前年に行われた文部科学省と兵庫大学の共催で実施した「熟議 2012 in 兵庫大学」の成功を踏まえ、地域の大学として、加古川地域（加古川市、高砂市、稲美町、播磨町の二市二町）の活性化をテーマに熟議を継続することとした。熟議の企画運営にあたる熟議プロジェクトチームが発足した。熟議プロジェクトチームは、3年計画の熟議で結論を導き出すことを決する。いわば長期を見据えた熟議の計画を策定したのである。そして、1年目は、課題を見出し、2年目に課題の解決策を考え、3年目に政策を提言するなど、実行に移すという段階を踏むことになった。基本的にこのプロジェクトチームが熟議の企画、運営を行う。下記は、「熟議 2015 in 兵庫大学」の時点でのプロジェクトチームのメンバーである。



熟議プロジェクトチーム（「熟議 2015 in 兵庫大学」）

- ・田端 和彦 兵庫大学エクステンション・カレッジ長 / 社会福祉学科 教授
- ・吉原 恵子 生涯福祉学部長 / 社会福祉学科 教授
- ・北島 律之 情報メディアセンター長 / 社会福祉学科 教授
- ・木下 幸文 健康システム学科 教授
- ・森下 博 経済情報学科 准教授
- ・久井 志保 看護学科 准教授
- ・小林 洋司 短期大学部保育科 講師
- ・岩崎 治夫 学長室長
- ・柏村 裕美 学長室員

地域を考える、という兵庫大学での熟議の方針は、その後、2015年までの間に、兵庫大学が進めるCOC (Center of Community) における役割も与えられることになった。兵庫大学では、大学の特性などを踏まえ、地域の拠点として、地域の活性化や再生、競争力の強化などに積極的に関与し、その地位を確立することを目指す。その結果、兵庫大学での熟議は、徐々に、市民による話し合いの機会として、民主主義における主要な手法である熟議の普及を図るという手法の確立、という方針に加えて、COCの要との位置づけが追加されるようになった。その一環として、主要なパートナーとしての加古川市の役割も大きくなった。実際、加古川地域をテーマとする2年目の「熟議 2014 in 兵庫大学」より加古川市が共催団体として運営にも関与、「熟議 2015 in 兵庫大学」では企画にも参加している。

さて、1年目の熟議、「熟議 2013 in 兵庫大学」では、テーマを「加古川地域の未来について話をしよう！～世代を超えた熟議～」と定めた。加古川地域にある課題を明らかにすることを目的とする。そのための方法として、SWOT分析の考え方を踏まえて、加古川地域の強みと弱みをまず明らかにすることから、議論を経て課題を明らかにした。

熟議の結果、加古川地域の「強み」を強化するために、世代を超えての交流とコミュニケーションの活性化など「地域への参加」が課題として挙げられ、また「弱み」を克服するために地域の変革に必要な「人材の活かし方」が課題となっていた。その上で、共通して、加古川地域の犯罪の発生率の高さや交通事故が多いことなど安心・安全に係る内容が指摘されていることを踏まえ、安心・安全は熟議により合意形成を行う具体的な課題として適切であるとされた。

2年目の熟議、「熟議 2014 in 兵庫大学」においては、前年に挙げられた課題の解決策を熟議により探り、見出すことを目的としている。熟議プロジェクトチームでは、前年の課題の導出を再度検証しながら、「地域への参加」や「人材の活かし方」等の課題については、解決策を見出すことが難しい、という懸念が示された。これら課題は、従前より地域の活性化や再生において、繰り返し指摘されながら、具体的な解決策がなかなか得られなかったことも事実である。そこで、熟議による議論に向く具体的な課題として、安心・安全を取り上げることとした。加古川市をはじめ多くの自治体では、安心・安全を例えば長期総合計画に組み込むなど、行政課題の一つとしており、安心・安全を課題とした場合、行政への提言などを3年目に行う場合にも安心・安全という課題は適切であるとの結論に達した。

ところで、「熟議 2014 in 兵庫大学」を企画する段階では、熟議の進め方についても再度検討を行った。それは解決策に関する結論が出た後、政策提言など実行に移すまでの道筋を、従前の熟議手法で導くことができるか、という点である。兵庫大学熟議手法は、議論の後、それを共有し実行するまでの段階を包摂することを目指すものである。しかし、ワークショップを手法とする熟議では、合意しやすい内容に結論としては陥り易い。それは責任が明確ではなくなるなど、次のステップに移る場合に、議論の土台を作りにくい。安心・安全も幅広い要素があるため、できる限り詳細な、参加者にとって身近なレベルにまで課題を絞る。そして課題を絞ることを熟慮に組み込むこととした。議論の対象となったことは2つの具体的な課題 (1) 安全・危険の判断は誰がすべきか、及び (2) 防犯カメラは必要か、である。こうして2つの課題についての議論が行われた。

議論での結論は、(1)については自分での判断を、(2)では必要ということであった。そうした結論の一方で、具体的な方法論、例えば(1)については、行政が提供する公的な情報と地域での独自の情報を組み合わせることによって判断の基盤とする、などの点である。

さて、3年目であり、加古川地域についての熟議の最終年度となる、「熟議 2015 in 兵庫大学」では、この結論を踏まえて政策提言などを行うこととなった。加古川地域を考える上で課題となっている安心・安全についての、実行に向けた集大成の計画を作成する必要があった。

## 2. 「熟議 2015 in 兵庫大学」の課題

とはいえ、熟議プロジェクトチームは、当初より解決策の実行に向けた具体的な方法を考えることで大きな障害に直面することとなった。すなわち「熟議 2014 in 兵庫大学」での結論を踏まえての、政策提言など実効性のある方策を見出すことが困難と判断された。前述のように、熟慮の際に課題を詳細に絞り、それを議論することは、熟議の流れの中で、参加者の意見集約の方法としては、有効な手法であったことは確かである。しかし、出た結論が明確であるがゆえに、それ以上の議論の範囲が相当に狭まった。例えば、防犯カメラの必要性の有無の結論は、「有り」となっており、この結論に基づく実効性ある方策は、技術的な内容、制度設計上の内容を検討することによって得られるものであって、これは専門家集団に委ねるべき点であり、様々な年代の市民が集まって、熟慮し議論を行うという兵庫大学での熟議とは異なるものと考えられた。つまり、従前の熟議手法では、当初想定した通りに、ステップ3で、安心・安全の解決策としてステップ2で得られた「防災カメラの設置」、「災害時には自己判断で行動すること」を実現可能にするため、熟議をする、ということが相当に難しいと考えられた。

「熟議 2014 in 兵庫大学」では、明確な結論が得られたが、議論の内容を詳細に検証すると、(1)の安全・危険の判断では、自己で判断をするためには地域と住民個々との関わりが重要であると指摘され、また(2)の場合、防犯カメラの設置の効用を認めつつも、それだけではなく犯罪を抑止するために地域での活動を強化することの重要性が示されている。つまり、結論は明確であっても、その背景には地域とのかかわりが強く示唆されていた。つまり、政策の提言など実行に移すためには、地域とのかかわりを議論する必要があると考えられた。

さらに、熟議プロジェクトチームでは、企画の立案にあたって最終の着地点、つまり実行に移すことの定義を再度、考慮せざるを得なかった。当初、3年間の熟議では政策提言を一つの結論にすることを想定していた。しかし政策提言を行うだけで実行する、といえるのか、むしろ自律的な行動も求められるのではないか、との提起がプロジェクトチーム内であった。政策提言を行っても実現するかどうかは、行政または立法府に委ねられることになる。例えば、熟議に参加する市民の数が、有権者の相当数を占める場合、熟議の結論を無視することはできないであろう。それは一種のレファレンダム（住民投票）

に近いものと扱われる<sup>1</sup>。熟議のように比較的規模は小さくとも、課題について市民が熟慮し議論するという適切なプロセスを経る仕組みの場合、課題解決に適した政策提言を行っていることを、政策担当者、あるいは決定者が認識をしない限り、提言が有効に扱われる可能性は低い。加古川地域の自治体も課題と認識することを熟議のテーマとして取り上げるだけでは、必ずしも十分ではない。

熟議プロジェクトチームでの討議の結果、市民自らの役割も含めた政策提言や市民の自立的な活動の具体的提案といった、市民を巻き込む内容を、実行に移すことの具体的内容、すなわち最終の着地点とすることとなった。そして、前年の成果を踏まえ、地域とのかかわりを議論の中心に据えた上で、地域に安心・安全をもたらす具体的な方法を熟議で考えるのである。地域をキーワードとすることで、より議論の幅が広がる。そもそも兵庫大学熟議手法では、議論の場にワークショップ方式を採用している。ワークショップ方式は、ディベートのような相手を説得するという議論ではなく、より話の幅を広げた上で意見の集約を図るため、幅広い議論を希望する場合に適している。これまでの兵庫大学熟議手法を活用するのであれば、このワークショップの特性を発揮する課題を取り上げるに限る。こうした事情を鑑み、「熟議 2015 in 兵庫大学」のテーマを「加古川地域のちから～安心・安全を創る～」とした。

今後の社会のあり方は、行政制度だけではなくその意思決定も含めて市民の力を活かすことが重要となる。地域を考える熟議の最終年度となる「熟議 2015 兵庫大学」で、その部分をより深く議論すること、そして従前の安心・安全を課題に新たな市民社会の形成に向けての第一歩にする。

さて、「加古川地域のちから」という課題であるが、「ちから」とは何を意味するのであろうか。「ちから」=Power とは、モノを動かす原動力であり、環境や他者へ働きかける力と考えることができる。「加古川地域のちから」とは加古川地域が持つ、加古川地域を変革するための影響力であり、主として市民が加古川地域をよりよくするために、つまり内への方向への影響力を想定する。その源泉として具体的には、地域に存する NPO やボランティアなどの組織、人材などの地域の資源、いわゆるソーシャルキャピタルとされるネットワークや互恵に基づく関係が考えられる。さらにこの「ちから」を発揮するために必要な金融や制度、機関などを組み合わせ、実現可能な方法を導き出すのが熟議に期待されると思われる。1年目の熟議「熟議 2013 in 兵庫大学」で出された課題、「地域への参加」や「人材の活かし方」とも関連して議論されることが期待された。

学内に設けた熟議プロジェクトチームは、以上のような過程を経て課題を固めた上で、共催の相手ともなる加古川市とも検討を行い、テーマの理解を得るとともに、加古川市としては、地域の住民の自立的な動きを歓迎したい、自分たちのアイデアや努力によって、自分たちが生活しやすくなるということに気づいて欲しい、との意見を得た。その上で、公共施設の老朽化、子育て世代からみる安心や犯罪の課題、事件や事故が、例えば投資や居住をためらわせるなど、経済的な波及効果について議論があることを期待する、とされた。

---

<sup>1</sup> 大阪都構想の是非、あるいはスコットランド独立の可否に見られるように、住民の生存にもかかわる重大課題を相当の規模のレファレンダムにより決する直接民主主義の動きも、議会制民主主義を基盤としつつ、それを支える役割という位置づけにおいて、熟議型民主主義と共通すると考えられる。

ワークショップ方式を活かすために、議論を広げることを企図した課題としての「加古川のちから」は、多様な捉え方があるため、ワークショップにより意見を集約するためには工夫が必要となる。そこで、「加古川のちから～安心・安全を創る～」をメインテーマとして、安心・安全を市民が創り出すための、より具体的な課題を導き出し、さらにその具体的な課題について解決策まで導く、という2段階方式での議論を想定する。

第一段階では、例えば20年後の将来を想定して、課題を見出す議論を行う。特に課題の要因は何か、といった点をまず明確にする。第二段階では、その課題の解決を議論する。20年後に備えて、ということでもよいのかもしれない。行政に頼るだけではなく、今の自分たちの資源や事情を踏まえ、そこにアイデアや努力を付加することによって、自分たちが安心して生活しやすくなる、という提案を求める。20年以内には相当の確率で、南海トラフ地震が発生すると言われるが、その時期、高齢化が進み不安が増す中であって、住民同士の防災ネットワークを学校とつなげることで、学校を核にまずは「生き残る」ことを考えるなどの議論ができると思われる。

### 3. 熟慮の段階とウェブページ

兵庫大学熟慮方式は、次のようなステップで進める。これは過去3年間の継続する熟議の中で、確立してきた流れである。



熟慮の段階は、議論に至るまでにテーマについて参加者が調べ、考えるという機会である。熟慮の段階で、参加者は兵庫大学のウェブページを用いて考えることとなっている。「熟議2013 in 兵庫大学」では、地域を考えるために、郵送により熟議プロジェクトチームからの情報の提供を行ったが、翌年の「熟議2014 in 兵庫大学」では、熟議プロジェクトチームと参加者の双方向のやり取りと即時の情報の提供のためウェブページを設け、安心・安全というテーマを、身近な課題に絞り込む熟慮に活用したことは前述の通りである。「熟議2015 in 兵庫大学」でも熟慮の機会に、ウェブページを用いる。そのコンテンツは、熟議プロジェクトチームの吉原が中心となって構成した。コンテンツの制作にあたっては、熟慮の段階を事前学習と捉え、思考のプロセスを辿るものになるような工夫がなされている。

最初は準備段階で、用語についての認識を問うことになる。第一に、加古川地域のちからというテーマでは、「ちから」を参加者がどのように捉えるかということが重要となる。参加者がその認識を持つ機会となる。学びにおいては、考えを記述することも重要となる。ここにインターネットの、リアルタイムでの双方向性を生かした。第二に、安心・安全をテーマとしているが、そもそも私たちは安心、安

全という語を特に区別して使うことがあまりない。熟慮にも、議論をする基盤とするにも用語の整理は不可欠である。定義を明示した上で、参加者のそれらの語に対する認識を整理してもらう。

議論に係る段階では、まず地域における、安心・安全に関わる自分自身の経験を振り返り、これを熟議プロジェクトチームでは「記憶を辿る機会」と呼ぶ。この「記憶を辿る機会」の必要性は、多様な年代の方が参加する熟議から生じている。地元根付き地元での経験が多い高齢者や社会人と、その経験が十分ではない高校生や大学生など若年者が同じテーブルで議論をするとどうしても、議論の内容に差が生じる。そこで議論のベースが必要となる。つまり、高齢者も若年者も同じく、地域における自分の経験の中での安心・安全に関わる点を振り返ることができる。それを認識したうえで議論に臨むことが基盤となる。少なくとも、2段階に分かれる議論の第一段階に設定した課題を考える、という場面であって、自らの経験を語る機会を持つことができる。

続いて、地域の力をもって解決することを考える。その場合、地域についても認識を喚起する必要があるだろう。安心・安全、との語以上に、地域とのいう用語も様々な使用の方法がある。兵庫大学が行う熟議では地域を、東播磨2市2町としているが、実際、具体的な活動として市民がそのちからを発揮するためには、身近な範囲の地域での課題を考え、解決策を考えるだろう。つまり、参加者が事前に地域の認識を新たにしておくことで、それぞれが想定する地域が異なっていることを理解し、議論の場では、互いに異なる環境下での地域の課題解決の方策を話し合い、共有することも可能になる。

こうした学びのステップをウェブページに公開し、参加者がそこにアクセスし、ステップを追いながら議論に備える。併せて加古川地域の安心・安全、また加古川地域のちからにかかわる資料集を独自に作成し、ウェブページで公開した。なおウェブページに実際に提示した内容については巻末資料編に示す。

前述のように、本学では、2014年度より熟議の特設ページの立ち上げとその運用を開始した。そして引き続き、2015年度も「熟議2015 in 兵庫大学」特設ページを開設している。その目的について、ウェブページ開設時に掲げられた3点をまず確認する。

1点目は、熟議について広く告知を行い、参加者の募集につなげることで、そして当該事業について全国に情報を発信し、兵庫大学・兵庫大学短期大学部の知名度向上を図ることである。2点目は、資料を提供し、主催者と参加者との意見の交換をおこない、熟議当日までの熟慮の段階の充実を図ること、そして議論を深化させ、参加者の参画意識と協働の可能性を高めることである。3点目は、これまでの熟議の成果等を掲載することで3年計画の位置づけを明確にし、積み重ねてきた成果を踏まえて本年度の熟議があることの認識を共有することである。

開設は、2015年7月7日、次のURLでの公開となった【図1-3-1】。

<http://www.hyogo-dai.ac.jp/jukugi/>

大学の公式ウェブサイトのトップページのメニュー「社会貢献・生涯学習」には、「熟議」の項目が盛り込まれ、「熟議 2015 in 兵庫大学」特設ページへのリンクが掲載された。

| 大学TOP | 熟議 | 熟議2015 |

## 熟議2015 in 兵庫大学

兵庫大学・兵庫大学短期大学部  
熟議プロジェクトチーム

お知らせ	熟議の関連資料	意見と回答	過去の熟議開催	関連リンク集	熟議の学習広場	問い合わせ
------	---------	-------	---------	--------	---------	-------

トップページ > お知らせ

**熟議2015チラシ**

<http://www.hyogo-da.ac.jp/dajugi/>

**新着情報**

ウェブの更新やさまざまなお知らせを記します。

- 【ご案内】 2015/11/22 「熟議2015 in 兵庫大学」の開催日を迎えました。
- 【ご案内】 2015/10/31 熟議参加高校生(希望者)対象の研修会を実施しました。
- 【ご案内】 2015/10/30 熟議の進め方および事前学習内容を掲載しました。
- 【ご案内】 2015/10/30 資料集「加古川地域のちから」を掲載しました。
- 【ご案内】 2015/10/30 参加者の皆様に熟議関連資料を発送しました。
- 【ご案内】 2015/10/17 意見と回答ページに寄稿文を掲載しました。
- 【ご案内】 2015/10/16 参加高校生(希望者)対象の研修会日程を掲載しました。
- 【ご案内】 2015/10/16 本学学生対象の研修会日程を掲載しました。

Copyright(C) 2015 HYOGO UNIVERSITY. All Rights Reserved.

図 1-3-1 「熟議 2015 in 兵庫大学」特設ページ（一部抜粋）

今回、特にウェブページが役割を担った事項 3 点を挙げることにし、一つずつ見ていく。

### ①熟議の参加募集（参加申し込みフォームへのいざない）

ここ数年、高校生の熟議参加の割合が大きい。これは近隣の高等学校へ積極的に案内をおこなってきたためである。本学の学生を含め、若い世代の方の参加は会の活性化につながる。一方で幅広い世代の方々が集うのもこの熟議の意義であり、欠かせない。ワークショップのグループ構成を考えた時、その参加募集は非常に重要となる。「熟議 2015 in 兵庫大学」のチラシはもとより、実施要項を掲載して、趣旨を深く理解して頂いた上での参加を促した。参加申し込みにあたっては個人情報が含まれるため、その管轄である学長室のもとで入力フォームの作成とデータ管理がおこなわれた。その参加申し込みフォームへスムーズにいざなうことの役割を「熟議 2015 in 兵庫大学」特設ページが担った。新しい情報

を随時掲載し、特に参加者の申し込み状況を日々発信することで、既に参加申し込みをされた方、そして参加申し込みを検討されている方への情報提供に努めた。

## ②熟議参加者への情報提示（研修会の告知と報告）

熟議参加者の中には、毎年参加頂いている方や今回はじめて参加される方がおられ、多岐にわたる。そのため、2012年から2014年までの過去の熟議開催にまつわる内容やその報告書を掲載した。特に2014年より開設したウェブページについては、まるごと閲覧できるようにした。今回は、熟議のテーマに関わる寄稿文の掲載や参加高校生の研修会の様子なども報告することができた。

## ③熟慮の段階における事前学習（ネット学習の実践）

本学が実施している熟議手法では、熟議当日の議論の段階の前に熟慮の段階がある。これは「事前にテーマについての学習をおこない、課題に対する認識と議論に臨む準備をする」と位置づけられている。当日の議論の活性化には欠かせない重要な段階といえる。熟慮の段階については、以前から参加者と熟議プロジェクトチームとの双方向性を高める必要性が挙げられていた。2012年および2013年は資料と回答シートを参加者に郵送し、紙媒体で返信するというスタイルで実施された。2014年は、ウェブページを通じて、問いかけに対する回答の一部をウェブページ上に掲載して内容の共有を図った。今年は、より充実した事前学習の方法を模索し、eラーニングを意識したネット学習の実践をおこなった。

3点目の熟慮の段階が、吉原のコンテンツを生かした部分であり、この点についてさらに記述する。この熟慮の段階では、与えられたテーマや質問に対して自身の考えをまとめることが目的であり、それを熟議当日に持ち寄ることになっている。その意味でコンテンツとその実施方法が重要となる。コンテンツについては、熟議プロジェクトチームメンバーが専門的立場からその内容の構成と作成にあたることになり、それを受けてページを構築した【図 1-3-2】。

その際、次のような展開のポイントが示された。

- 1) 熟慮の段階における事前学習は Part1,2,3 の三部構成とする。それぞれにスライドが用意された (Part1 は 10 枚、Part2 は 23 枚、Part3 は 13 枚)。
- 2) スライドは自身のペースで切り替えることとし、表示されているスライドの解説の音声も自身のタイミングで再生できるようにする。
- 3) スライドによる学習をしながら、その問いについて並行して回答できるようにする。

当初、スライドの動画再生を試みたが、ファイル容量が膨大になり、サーバの負荷にも影響を与えることが懸念された。そこで、静止画の各スライドとそれに合わせた音声ファイルを用意し、紐付けながら表示と音声の再生を実現した。これによりファイル容量の問題は大きく解消された。スライドを停止しながら、別画面での回答入力をおこなうこととし、また Part1,2,3 それぞれ別々に回答を送信することで、日をあらためてじっくりと取り組むことを可能とした。なお、スライドに合わせた音声



による解説は熟慮プロジェクトチームのメンバーが担当し、さらに目で追えるように文字情報の表示も用意した。そして、ブラウザの種類や環境などにもできる限り対応できるように努めた。今回「熟慮の学習広場」のメニューにページを設け、事前学習の進め方の説明はもとより、テーマに即した資料集も置いて、熟慮の段階の充実を図った。こうして動作確認をおこない、参加者の学習とその回答を待つことにした。

図 1-3-2 熟慮「Part1」のスライドの表紙（以降 10 枚続く）

結果、Part1, 2, 3とも参加者の約6割の回答があった。残りの4割は、スライドによる学習をしたものの回答の送信をしなかった、またはネット環境がなかったなどが原因として考えられる。ネット学習による「熟慮」について、今後の改善のため、使いやすさや理解しやすさなどの感想のアンケートをとったところ、「使いやすかった」との回答がある一方、「使いにくかった」との回答もあった。また「熟

慮のプロセスがあったからこそ、当日の議論が円滑で内容の濃いものになったと感じた」との回答に加え、「方法については、インターネット以外の方法があっても良いのではと感じた」との回答が寄せられた。特に「ネットより紙で回答の方がよかった」との回答が複数寄せられたことは、熟慮の段階でのウェブページを活用した進め方について再度検討を重ねる必要がある。いずれにしても、ネット学習の実践とその反応を得られたことは収穫であった。

当然のことであるが、熟慮の場面のみならず、熟議の特設ページは、兵庫大学熟議手法のそれぞれの段階を活性化するための一つのツールとして、その役割を担っており、大いに活かされることが期待される。なお、今回、熟慮の段階については、メディアを活用したネット学習形態を取り入れ、新たな試みを実施しており、今後の熟議手法の改善にも寄与するものである。

なお、各人の熟慮の段階における問いと回答のまとめについては、後に触れる「熟議速報資料」にて当日の様子とともに掲載され、熟議終了と同時に参加者の手に渡った。熟議当日前に、「熟議の学習広場」での双方向的に学習できる仕組みができれば、熟慮の段階は深みを増すと思われる。さらには、議論の段階における即時性のある情報のアップ、共有の段階における議論の成果の提示、事後学習の場の提供なども検討すべき課題といえる。今回ネット学習の際はアクセスが集中したものの、一定のアクセスが継続するような状況には至らなかった。日々の更新がコンスタントにできたとはいえ、地域への発信の在り方や運用の仕方についての反省点は少なくない。

この熟議の特設ページが地域への情報発信に大きな役割を果たすためには、熟議参加者だけに利用されるのではなく、多くの方々に見て頂けるような媒体に進化することが望まれる。2012年から開始した熟議とその報告書については、「過去の熟議開催」内にデータが蓄積されている。2014年から運用を開始した熟議の特設ページは、本学が地域と連携して取り組んでいることを知って頂くツールとして役割を果たさなければならない。これまでの運用が、地域に根ざした取り組みの一端を担っていることにつながっていれば幸いなことである。

## 4. 議論の段階の企画の作成

### (1) 参加者の満足度向上のために

4回目の熟議となり、毎回の参加者が増えるとともに、前年とは異なる熟議の進め方が求められる。前述した通りウェブページを開設したことも、そうした試みである。参加者はそれぞれの熟議の機会、満足度を求めておりその工夫が求められる。「熟議 2013 in 兵庫大学」でのアンケート調査によると、満足度は、「とても満足」が 50.0%、「まあ満足」46.2%であったのに対し、翌年「熟議 2014 in 兵庫大学」では、「とても満足」が 38.0%、「まあ満足」55.4%と、満足度が低下していた。満足度を上げることが、翌年の熟議の参加者を拡大することに不可欠である。

その契機となったのは、他で行われる熟議や話し合いの機会に熟議プロジェクトチームのメンバーが参加したことにある。それぞれが行う工夫は、前向きに参加し、参加することによって報われる、という思いを参加者が持つためのものであった。

そこで、熟議プロジェクトチームでは次の点を検討した。第一に、速報性を持って、参加者へ熟議での議論の結果を伝えることである。熟議の成果は、ウェブページの他、各種分析を行った後の当該報告書により参加者に還元される。しかしウェブページは必ずしも全員が見る、ということではなく、また報告書はその完成に相当の時間を要するため、速報性とは言えない。望ましいのは、議論の当日に議論された成果を還元することである。第二に、熟慮の結果を明示する場を設けることである。熟慮したことは議論の場で発揮されることとなる。とはいえ、ウェブ上で意見を述べ、回答を行った参加者は、当然、次の議論の場にあつてその結果を知りたいと考える。これに対する返答が十分ではなかった。第三には、参加者全員が場を共有したとの実感を持つことである。ワークショップでの議論、その後の共有の場での議論など、複数の場面を、これまでの熟議では教室の移動により対応してきた。テーブルでの議論が終わり、移動の間にその熱気はやはり冷めてしまい、その思いを持って全員参加の場で共有することが難しい状況にあった。第四に、参加者からの声にしばしばあつた、時間が短いという不満に対応することである。そして、第五に、何かを作り出すという達成感を持ってもらうことである。兵庫大学熟議手法では、ワークショップで結果を作り出し、それを共有することができるようになっているが、それを参加者が知覚してもらう工夫が十分ではなかったのではないか。

以上について、集大成となる「熟議 2015 in 兵庫大学」での対応を計画に盛り込む。

まず、議論当日に、速報を発行し参加者に配布する。このことにより、当日の議論の様子を、速報をもって参加者に還元することができる。このアイディアは、国立明石工業高等専門学校で行われた「熟議 DAY」での経験を参考にした。同じく熟議を掲げるこの事業は「熟議 2015 in 兵庫大学」に先立つ 2015 年 6 月 14 日（日）に「明石高専の可能性」をテーマに開催され、熟議カケアイの発案者でもある鈴木寛文部科学大臣補佐官なども参加する内容であった。この際、速報が発行され、最後に参加者にも配布された。これは参加者にとっては場の共有の感覚を持つツールともなった。

編集や印刷時間を考えれば、熟議の進行中に全ての議論の結果を速報に盛り込むことはできないが、可能な範囲でワークショップの結果を掲載する方針とした。議論が終わり閉会の際に議論の成果として配布する。参加者は、結果をすぐ手元に持つことができ、その場で文字として議論の結果を共有するだけでなく、ともに議論をしたという一体感も持つことができる。さらにこの速報に熟慮の結果を掲載することにより、参加者は熟慮の際に兵庫大学へと返答した回答が分析等に生かされていることが理解されるであろう。また資料としての価値も向上することが期待される。

次に、議論と共有の段階、当日で使用する時間を午前、午後の終日とする。従前、熟議は午後から開始し、夕方までの時間で終了していた。しかし、「熟議 2015 in 兵庫大学」は、これまでの熟議の集大成ということもあり、終日の時間いっぱいを使用する方針とした。実際に 2 段階の熟議を行う場合、午後だけでは時間が不足する、ということは熟議プロジェクトチームでの時間シミュレーションで示され

ていた事実である。終日を熟議に充てることで、上記に示す参加者の不満としてあった議論の時間が短い、という点にも対応する。

さらに、会場を大きな1会場として、そこで議論と共有の段階を行うこととなった。これまで本学の教室を用いて議論を行ってきたが、最初の説明、テーブルに分かれてのワークショップ、ワークショップの成果の共有にあたって、大教室、小教室を短時間で移動しなければならない、という課題があった。この点が、慌ただしい印象を参加者に与えていたことは否めない。会場を1つとして、そこに全てのテーブルを配置し、1会場で、最初の説明、ワークショップ、共有を行う。この結果、移動に係る時間が不要になる他、同じ部屋で長時間を過ごすことで、参加者が場を共有する一体感を持つこともできる。さらに、最初の説明からテーブルを共にすることで、ワークショップにおけるアイスブレイクの役割を果たすことも可能になり、ワークショップでの議論を盛り上げることにもつながる。熟議プロジェクトチームではさらに、全てのテーブルが一堂に会し、ワークショップを1会場で行うことにおける利点として、進行を把握し制御しやすい点も指摘した。複数の教室に分かれてのワークショップの場合、テーブルにより進行の差がある。熟議プロジェクトチームのメンバーがそれぞれの教室を担当し、やむを得ず調整等の介入を行うこともしばしばあった。またワークショップのファシリテーターとなった学生からは、時間や進行の管理にのみ気を取られた、との意見も多数あった。1会場での進行の場合、メインファシリテーターを立て、時間管理を行うことで、各テーブルのテーブルファシリテーターは、ワークショップの議論に集中して、参加者の意見を最大限テーブルに出すことができるであろう。

メインファシリテーターは、そうした機会が多く経験が豊富な、山崎清治氏（NPO 法人 生涯学習サポート兵庫 理事長）が務めることになった。山崎氏は「熟議 2014 in 兵庫大学」において、共有の段階におけるメインファシリテーターを務めた。

最後に、何かを作り出すという達成感を参加者が持つことができるような工夫が必要である。熟議プロジェクトチームは、ワークショップの最後に、各テーブルでの結論を川柳にする、という案をまとめた。川柳など短い文章にする、ということは結論を再度見直し、集団での創作というプロセスを加えることにより、テーブルでの結論を共有することにも寄与する。その後、メインファシリテーターの山崎氏の案もあり、「カルタ」とすることに決し、最終的に、2段階の議論とその結論をカルタにまとめる、という進行に結びついた。

## (2) 議論・共有の段階の企画

「熟議 2015 in 兵庫大学」では、2段階の議論を行うことを軸として、参加者の満足度を高める、との観点からの工夫を盛り込んでの企画の作成を進め、議論と共有の段階により構成される次のような当日プログラムを確定した。

	時間	所要時間	内容
全体会	9:30～10:00	(30分)	受付
	10:00～10:10	(10分)	開会の挨拶
	10:10～10:20	(15分)	テーマ等の説明
グループワーク	10:25～10:40	(15分)	アイスブレイキング
	10:40～12:00	(80分)	熟議（第一段階議論）… ワークショップ
	12:00～12:40	(40分)	昼食
	12:40～13:50	(70分)	熟議（第二段階議論）… ワークショップ
	13:50～14:30	(40分)	まとめ・休憩
全体会	14:30～15:20	(50分)	議論の結果の共有と講評、挨拶
	15:20～15:45	(25分)	総括
	15:45～16:00	(15分)	閉会（総括）

まず議論の段階となるグループワークの内容の企画の詳細に触れておく。

第一段階は、前述のように、地域における安心・安全の課題を明らかにすることである。その前提として熟慮で行った言葉の整理や「記憶を辿る」という作業により、体験に基づく安心・安全に対する脅威をテーブルに提出し、議論によって整理をする。今回、各テーブルで3つの課題を出すことが指示されており、その課題をフリップボードに書き込むまでを第一段階とする。フリップボードへの記載により、テーブルで出された課題を参加者全員が共有することを目的としている。

第二段階は、第一段階での課題についての解決策を話し合う。課題の解決に地域のちからを活用するためにはどうすべきか、をワークショップ方式で議論をする。その際に、2つの課題を取り上げることとしているが、今回、工夫として、1つは第一段階で話し合った課題を、もう1つは別のテーブルで出された課題を話し合う、という条件を付ける点にある。これは参加者が、第二段階で議論すべき課題を見出すために、全ての課題を読むことになり、結果、課題の共有が自然とはかれる。そして2つの課題の議論の後、まとめの段階で、解決策を踏まえたカルタを作成する。

以上が、「熟議 2015 in 兵庫大学」における議論の段階の内容である。

共有の段階であるが、その機会を複数設ける点が今回の「熟議 2015 in 兵庫大学」の特徴である。すなわち、安心・安全の課題をフリップボードで提出し共有する、当日発行する速報に議論の結論を掲載し共有する、そして作成したカルタを共有の時間に共有する、というものである。この、カルタの共有の段階にも山崎氏が引き続きメインファシリテーターを担うことで、議論の段階との連続性を持たせる。

### (3) 兵庫大学熟議手法の特徴を活かして

兵庫大学熟議手法の特徴としては、まず討議型世論調査を応用している点がある。討議型世論調査では参加者に対し、熟慮、議論の前後でのアンケート調査により、意見や態度の変化を見る。従前より、兵庫大学熟議手法では、記名式での事前、事後のアンケートを行っている。過去3回のアンケートにおいて、熟議の進め方については共通しており、テーマに関連した質問項目を設けることとなっている。この項目については、事前と事後での変化を追跡することができるよう同一の質問としている。

事前アンケートは、郵送法による配布と回収をおこなっている。参加者に対しては、『「熟議 2015 in 兵庫大学」の進め方（資料 A）』を配布、その際に事前アンケートを配布している。一方、事後アンケートは、議論の当日、全てのプログラムの終了後に実施する。両者とも記名式のアンケートであるため、事前と事後の変化を個人ベースで追跡し分析することを可能にしている。

次に、学生の参加について触れる。兵庫大学では、「熟議 2012 in 兵庫大学」以来、学生がファシリテーターを務め、熟議の機会を学生の教育に生かすことを試みている。学生の参加は兵庫大学熟議手法の一つの特徴と言える。熟議に参加する学生及び高校生に対しては、主として自己認識シートにより、教育効果について分析をしており、これまで高い教育効果が得られていることを明らかにしている。「熟議 2015 in 兵庫大学」でも引き続き、講習会や予行演習を行う。その方法として、兵庫大学エクステンション・カレッジにおける教育機会を利用する。2015年度講座における「ワークショップの運営とファシリテーター養成のための講座」は、下記のような内容で開講される。

回	日程	時間	内容・講師
第1回	10月8日(木)	18:00~19:30	「ワークショップとはどのようなものか」 小林 洋司 (保育科講師)
第2回	10月15日(木)	18:00~19:30	「コミュニケーションの重要性」 北島 律之 (社会福祉学科教授)
第3回	10月22日(木)	18:00~19:30	「全員参加でのワークショップの実際①」 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)
第4回	10月29日(木)	18:00~19:30	「全員参加でのワークショップの実際②」 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)
第5回	11月5日(木)	18:00~19:30	「全員参加でのワークショップの実際③」 山崎 清治 (NPO 法人生涯学習サポート兵庫理事長)
第6回	11月12日(木)	18:00~19:30	「ファシリテーションの定着」 田端 和彦 (社会福祉学科教授)

熟議プロジェクトチームのメンバーの他、メインファシリテーターである山崎氏も講師を務める。もちろん、エクステンション・カレッジの講座は、市民の受講者を対象とするものであるため、熟議に特化した内容ではない。しかし、ワークショップの進め方や討議型民主主義の意義などを学ぶことは、教育効果もあると判断している。